

情報化社会における児童・生徒指導の実践的課題としての 情報モラル教育

——「つながり」を求める時代のネットいじめ問題に着目して——

長谷川 誠

神戸松蔭女子学院大学人間科学部

Author's E-mail Address: hase@shoin.ac.jp

Information morals education as a practical problem of student guidance in the information society: The issue of cyber-bullying in times when people demand “a connection”

HASEGAWA Makoto

Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University

Abstract

本稿の目的は、今日、児童、生徒指導上、重要な課題のひとつであるネットいじめ問題に着目しながら、かれらの「つながり」を求めるメンタリティが示す複雑な人間関係をめぐる諸課題や背景にある事柄を整理し、今後の情報モラル教育に必要な視点について検討することである。

かれらの「つながり」を求めるメンタリティについて、関連データを概観すると、「つながり」を求める一方で、そのつながりを「リセット」したいという複雑さが確認できた。また、その背景には、自己完結的なコミュニケーションの枠組みで人間関係を構築していることがあると述べている。そして、一見、純粋な関係に見えるかれらの関係性には、脆さが垣間みえるとともに、その関係が破たんした途端、ネット空間において自分自身を制御したい脅迫衝動が強まってしまい、例えば、被害者への中傷を抑えきれない状況に陥ってしまうことを指摘した。

最後に、自己完結的なコミュニケーションで成立する児童、生徒間の人間関係においてネット上でのトラブルを防ぐためには、情報モラル教育を通じて情報発信を自己で制御する力を育成することが重要であると論じている。

This study focuses on the issue of cyber-bullying which is one of the important topics in student

instruction. This study arranges the problems and background of complicated human relationships in which people desire a “connection” and examines the viewpoint that is necessary for future education of morals.

I was able to confirm the complexity of human relationships in which people wanted to “reset” their connection in a survey conducted about the mentality of wanting a “connection”. In addition, in the background, I may build human relationships in the framework of self-limiting communication. When there was fragility in human relationships and human relationships failed, there was a stronger impulse and it was harder for people to control themselves in cyberspace and, for example, people fell into the situation where they could not control slander to a victim.

Finally, I will discuss ways to prevent trouble on the Internet in their human relations to be established by self-limiting communication when it is important to bring up power to control information dispatch for will of the self through education of morals.

キーワード：情報社会、情報モラル教育、ネットいじめ

Key Words: Information society, Information morals education, cyber-bullying

1. 緒言

1990年代以降、情報通信技術が急速に発展し、社会活動の多くの場面において情報化が進展した。とりわけ、インターネットの普及は、我々の情報収集能力を高めることとなり、日常生活面、仕事面において、もはや欠かせないものとなっている。また、このような動きは、学校教育現場においても強まる一方である。児童や生徒の日常生活においては、学習面のみならず、コミュニケーションツールとして情報通信機器が浸透することとなり、その結果、人間関係を構築する上で多くの問題が生じることとなったのである。

なかでも、スマートフォンや携帯電話の利用をめぐるトラブルの増加は顕著である。藤川大祐(2014:18)は、「こうした端末の普及は、子どもたちの生活を大きく変えつつあり、ネットいじめをはじめとする生徒指導上の課題を生じさせる」ことや「不登校気味の児童・生徒は、ネットの長時間利用で生活習慣が乱れている可能性があり」、「ネットいじめに巻き込まれている可能性もある」と指摘している。とりわけ、ネットを通じたいじめ問題は深刻化しており、原清治(2011:151)は「ネットいじめは、他のいじめ以上に子どもの不安を煽り、自己の善悪の基準とはまったく異なった基準で判断をせざるを得ない状況に追いやるといった特徴がある。自己矛盾する判断は被害者のみならず、場合によっては加害者の子どもたちの心を傷つけ、苦しめることにつながる」と指摘し、ネットいじめを「仮想空間で生起している」出来事ではなく、直接的に行われる「現実世界でのいじめの延長」と認識し、その解決に取り組まなければならない」と論じている。

この藤川、原の指摘は、児童、生徒たちの学校生活においては、インターネットの影響を大きく受けていることや、ネット空間と現実空間を切り離して、インターネット上のトラブル(以下、ネットトラブル)の課題を語ることはできないことを示している点で重要といえる。

鈴木健介（2013：11）も、ウェブは既に現実空間と区別することはできない状況になっていることを指摘した上で、「ウェブで起きていることだけを独立して論じたり、あるいは現実がウェブよりも重要で優先されるものであるという前提に立って議論することが、もはや無意味になっている」と論じている。つまり、デジタルネイティブ世代といわれる、今の児童、生徒や若者たちにとって、インターネット上で起きる出来事は、リアルな出来事であり、その上で、児童、生徒は、閉鎖的な学校空間において人間関係を構築しているのである。

こうした実情について、土井隆義（2009：14-17）は、学校は「他人との密接な関係をなかなか強制された空間」であるとし、人間関係がカスタム化するスクール・カーストの序列づけにおいても、上手な人間関係を築けるコミュニケーション能力の高低が決める意味で、コミュニケーション能力こそが自己肯定感の基盤となっていることや、コミュニケーション能力とは自分の内部で完結するものではなく、相手との関係の総体である点から、自分では変えられない強い拘束力をもっていると指摘する。

まさに、児童、生徒にとっては上手に他人とつながることができる能力こそが、学校生活における人間関係上のトラブルを回避するための重要な能力となっており、しかも、その「つながり」を作るためには、否応無くスマートフォンや携帯電話等の情報通信機器を介することが条件となっていることから、かれらにとって情報通信機器は重要なコミュニケーションツールとならざるを得ないのである。2013年の厚生労働省の調査をみても、ネット依存の中高生が国内に約51万人いることが明らかになっていることは、そうした状況を裏付けている一面といえ、児童、生徒のネットトラブルに対しては、関係各所において早急の対策が求められることとなったのである。

本稿では、このような状況をふまえ、児童、生徒指導の実践的課題としての情報モラル教育を取り上げ、児童、生徒たちが遭遇するネットいじめ問題に着目しながら、「つながり」を求めるメンタリティが示す課題を探ってみたい。そして、その課題の背景にある、かれらの複雑化する人間関係の捉え方を整理し、今後の情報モラル教育に必要な新たな視点について考察してみたい。

2. 現代社会における情報モラル教育の必要性の高まり

ここでは、現在の学校教育における情報モラル教育についてみていくこととする。文部科学省は情報モラル教育について次のように述べている（文部科学省2009）。

情報モラル教育とは、情報社会やネットワークの特性の一側面として影の部分を理解した上で、よりよいコミュニケーションや人と人との関係づくりのために、今後も変化を続けていくであろう情報手段をいかに上手に賢く使っていくか、そのための判断力や心構えを身に付けさせる教育である。これらの内容は、情報化社会の進展に伴って変化していくものであるため、今後も柔軟かつ適切に対応することが必要である。また、普及の著しい携帯電話を始めとする携帯情報通信端末の様々な問題に対しては、地域や家庭との連携を図りつつ、情報モラルを身に付けさせる指導を適切に行う必要がある。

以上のように情報モラル教育においては、変化の激しい情報化社会では柔軟性が必要であることや、人間関係を構築していくなかで上手なコミュニケーションを図るための手段として情報活用していく能力、扱う情報を精査する判断能力を養うことが目的とされており、いかに適切に情報を活用するのかという点が重視されている。そして、この情報活用能力について文部科学省は、「高度情報通信ネットワーク社会が進展していく中で、児童生徒が、コンピュータやインターネットを活用し、情報社会に主体的に対応できること」とし、情報教育の目標としての情報活用能力を次の3点に整理している（文部科学省 1998）。

○情報活用の実践力

課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力

○情報の科学的な理解

情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解と、情報を適切に扱ったり、自らの情報活用を評価・改善するための基礎的な理論や方法の理解

○情報社会に参画する態度

社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度

これをみても、現代社会においては、情報を適切に扱うための基本的な技術や知識を養うことが必要となる。そして、情報モラル教育を通じて、こうした技術や知識が必須となっていることを児童、生徒に根気よく伝え、自らが情報社会に参加していく（あるいは、既に参加している）という意識を常に持ち、情報社会を構成している一員であることを自覚させることが重要となるであろう。

また、情報の取り扱いには神経を使う必要があることも認識しなくてはならない。情報教育学会（2013：9）は、情報モラルの問題を考える時に理解しておく必要がある「情報の性質」について次の3点を指摘する。

○残存性については「「もの」は、他者に渡すと自分の手元にはなくなってしまう。しかし、「情報」は他者に与えたことで自分の記憶が失われることはない」こと。

○複製性については「「もの」はまったく同じものを作ることは難しい。しかし、「情報」は容易に複製できる。特にデジタル情報は、劣化させずに短時間で大量の複製が可能である」こと。

○伝播性については「「もの」を送ると相手に届くには、時間がかかる。しかし、「情報」は短時間に伝播する」ことである。

この指摘は、インターネット等の情報ツールを活用しながら情報を取り扱い上で、使う側が十分に意識しなくてはならない事柄が整理されている点で意義がある。すなわち、情報というものは、一度、社会に発信されると、消去する難しさがああり、とりわけデジタル情報となると、発信者の意図とは別に大量に複製されたり、想像以上の速さで拡張したりする危険

性があるということである。

さらに、情報モラル教育をしなければならない理由には、社会性の面でまだまだ未成熟な児童、生徒に「情報」を扱うことの恐さや危険性を伝えることがある。そのためにも、我々、大人の側が情報モラルに関心を持ち、かつ児童、生徒の実態を把握しなければならない。とりわけ、学校教育現場においては、教師の役割が大切である。この点について中村哲也・島村一司(2008:139-151)は、生徒、保護者、教師への調査を通じて、情報モラル教育の重要性を指摘した上で「生徒達の規範意識を育む場である「学校」という空間において、一番身近な大人である教師自身も高い情報モラルを備え、生徒の指導にあたるのが、自然と生徒たち自身のモラルを高めていくことになることも意識しなければならない」と述べている。そして、繰り返し例としてあげられるネットいじめ等のトラブルへの対策についても、藤川(2014:18-19)は、「まず重要なことは、情報モラル教育の推進です。現行の学習指導要領では情報モラル教育の充実がうたわれています。情報モラル教育を学校の教育課程に位置づけ、児童・生徒が、ネットの長時間利用の問題、ネットいじめ等人間関係に関する問題、福祉被害や詐欺被害などの問題等について理解を深め、こうしたトラブルを避けられるように指導しなければなりません」と述べており、今後、学校教育現場における情報モラル教育の重要性は一層高まるといえる。

このように、今日の情報モラル教育においては、スマートフォンといった情報通信端末に関わる問題、なかでもネットいじめ等のネットトラブルへの対応が中心的な関心ごとになっている。こうした意識が醸成されている事については、NHKが2012年に実施した「中高生・高校生の生活と意識調査・2012」のなかで興味深い結果が得られている。この調査においてインターネットの利用等に関わる質問がいくつかなされているが、「中学生の60%、高校生の96%が「メール」を使い、高校生では3人に1人が「プロフやブログ」「ソーシャルメディア」も使っている。また「ネット上だけのつきあいで、実際には会ったことがない友だち」がいる人は、中学生で17%、高校生では32%に上るが、ネット利用者の3割が「ネット上の人間関係はトラブルが起きやすいと感じている」といった結果が報じられ、「ネット上だけの「友達」が増えている」といった指摘もなされている(NHK 2012)。つまり、中学生、高校生においては、ネット空間を中心に、相互行為が完結する友人関係、すなわち、ネット上の「つながり」を重視する思考が高まっており、かれらのコミュニティがネット空間の中で形成されていることがみてとれる。換言すると、かれらの人間関係上のトラブルの多くはネット空間を経由しながら生じているといえ、このことを考えれば、必然的に情報モラル教育の強化が求められるのである。

では、こうした状況において、文部科学省が示した情報教育の目標としての情報活用能力をどのように育成していけば良いのだろうか。情報活用能力とは、先述のとおり、「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の3つに整理されている。これを本稿の問題意識と照らし合わせると、すなわち、児童、生徒においては、友人とのコミュニケーションを目的に、スマートフォンや携帯電話等の情報機器を使って、情報を正しく発信、伝達できるのか。そして、そうした情報機器の特性を理解した上で、情報を適切に扱いその

内容を評価できているのか。学校生活を中心とした生活空間において、情報機器が及ぼしている影響を理解し、情報モラルに沿った責任ある使用ができてきているのか、といった点を認識し、実践できる能力といえるだろう。もちろん、このような考え方や方向性についての異論はない。しかしながら、学校現場において、こうした内容に沿った教育が積極的に取り組まれているにもかかわらず、インターネットを介したトラブルがあとを絶たないのはなぜだろうか。とりわけ、ネットいじめ問題については深刻化する一方である。本稿では、スマートフォンや携帯電話の依存の向こう側で広がる複雑化する人間関係をどのように捉えれば良いのか、この点に問題の本質の一端があると考え検討を進めてみたい。

3. 現代社会における「つながり」をめぐる諸課題

本節では、はじめに、児童、生徒において情報機器等のコミュニケーションツールがどの程度浸透しているのかを確認し、次に、児童、青年期における「つながり」をめぐる諸問題について、各種データを読み取りながら検討してみたい。

まず、現在の児童、生徒の携帯電話、スマートフォンの利用率についておさえておきたい（表1参照）。これをみると、スマートフォンで、小学生16.4%、中学生39.4%、高校生91.1%となり、これに対して携帯電話では同9.2%、同12.2%、同3.8%と、中学生で約4割、高校生では9割以上の生徒がスマートフォンを通じてインターネットにアクセスしている。また、機能を限定している等、一定の制約のある機器の利用率は小学生21.8%、中学生5.0%、高校生においては0.1%と、小学生でも8割以上、中高生では9割以上の生徒が、成人と同様のアクセスが可能な状況にあることがわかる。

次に、友人との連絡に利用する手段・機器についてみてみたい（表2参照）。小学生では、利用しないが最も多い58.0%となり、機器等を利用した場合は、スマートフォンやフィーチャーフォン（従来の携帯電話、以下、携帯電話）でのメールが13.3%となった。やはり、小学生では、所有率が低いため、数値としては他に比べても一様に低いことがわかる。

表1 子供のインターネット接続機器の利用率

学校種	人	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
小学生(計)	1,060	16.4	0.6	3.2	4.2	9.2	21.8	16.0	8.7	21.3	7.0
中学生(計)	1,349	39.4	1.3	2.9	3.8	12.2	5.0	21.1	10.3	21.5	4.2
高校生(計)	1,018	91.1	1.5	0.9	1.9	3.8	0.1	29.3	13.3	13.4	1.8

(出所) 内閣府「平成27年度 青少年のインターネット利用環境実態調査」2016 p.165より作成

しかし、中高生になると、スマートフォン等でのメールやLINEを通じて友人と連絡することが多くなっており、高校生においては利用しないが4.4%と非常に低くなり、友人との連絡手段にスマートフォン等の機器を使用していることがみてとれる。この調査の実施時期が2013年と3年前であることを考えると、現在のLINEの利用率は、さらに高くなっていることが考えられるが、表1のインターネットへの利用機器の状況と合わせて、とくに高校生から利用環境が大きく変化の様子がわかる点で有意義なデータであるといえる。そして、高校生以降の大学生、社会人でも同様の傾向がみられ、若者全体においてもこうした機器が友人とのコミュニケーションツールになっていることがうかがえる。このように、近年の児童、生徒間においては、スマートフォンや携帯電話によって、友人間のコミュニケーションが図られていることをみても、かれらにとって周囲と「つながる」ために、スマートフォンや携帯電話が必要ツールとなっていることがみてとれる。

続いて、こうした「つながり」が、かれらの日常生活にどのような影響を与えているのかみていきたい。表3は、「若者のつながりの数」に関する調査結果である。①の「つながりの数」をみると、高校生、大学生、20代社会人のいずれにおいても「女子」の数値が高い。そして、②の「素でいられるつながりの数」では、高校生女子の3.8が他の年齢層と比べても低くなっており、それは男子においても同様の傾向がみられたのである。さらに、③の「正直整理したいと思うつながりの数」では、高校生の男女が2.0となった。こうした状況をみても、高校生の時期においては、多くの「つながり」を求めつつも、自身が素でいられる関

表2 友人との連絡に利用する手段・機器（単位：％）

	スマートフォン/フィーチャーフォンでの通話	スマートフォン/フィーチャーフォンでのメール	LINE	Mixi	Facebook	twitter	その他	利用しない
小学校4年～6年生	9.6	13.3	1.3	0.0	0.2	0.0	17.5	58.0
中学生	10.3	37.0	8.1	0.0	1.0	1.6	15.7	26.4
高校生	11.5	54.0	21.1	0.4	0.8	5.2	2.7	4.4
大学生	11.6	49.2	31.8	0.3	0.4	4.1	0.7	1.9
社会人	21.0	47.3	21.6	0.8	2.0	2.5	1.7	3.1

(出所) 総務省情報通信政策研究所「青少年のインターネット利用と依存傾向に関する調査」2013 p.8 より作成

表3 若者のつながりの数

	高校生			大学生			20代社会人		
	①	②	③	①	②	③	①	②	③
男子	6.7	3.4	2.0	7.4	4.1	1.9	6.8	3.7	2.0
女子	7.7	3.8	2.0	8.3	4.4	1.8	7.6	4.0	2.0
平均	7.2	3.6	2.0	7.4	4.1	1.9	6.8	3.7	2.0

① つながりの数 (単位:個)

② 素でいられるつながりの数

③ 正直整理したいと思うつながりの数

(出所) 電通総研「若者まるわかり調査2015」2015 p.4 より作成

係は少なく、本当は整理したい関係もいくつか存在しているのである。つまり、かれらは、「つながりたい」感情と、「つながりたくない」感情の両方の狭間で日常を送っていることがみてとれる。

このようなかれらが抱く微妙な感情を裏付けるデータがある。表4は、若者のキャラの使い分けに関するデータであるが、これをみると、女子高校生は日常、6.6のキャラ数を使っていることが明らかとなった。この数値は、同年代の男子や他の年齢層の女子と比べても高いことがわかる。こうした傾向は、Twitterのアカウントの所有率やアカウント平均個数（表5参照）をみても、年齢層別においては高校生の所有率が高く、なかでも女子においては所有率72.8%、アカウント平均個数3.4と、他と比べても高い数値となっている。ここから、高校生におけるSNSの浸透度の高さや、つながる対象、場面においてアカウントを使い分けしている状況がみてとれるとともに、先ほどの表3、表4と合わせてみても、女子高校生の日常における「つながり」の複雑さがみえてくる。

そして、表6をみてみると、質問「人間関係をリセットしたくなる」に対して「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」と回答した割合は、各世代ともに女子が高く、なかでも女子

表4 若者のキャラの使い分け
(ふだんの生活で使うことのあるキャラの数)

	高校生	大学生	20代社会人
男子	4.9	4.2	3.2
女子	6.6	5.8	4.8
平均	5.7	5.0	4.0

(出所) 電通総研「若者まるわかり調査2015」2015 p.4より作成

表5 Twitter複数アカウント所有率と平均個数

	所有率(%)	アカウント平均個数
高校生(n=469)	62.7	3.1
男子(n=215)	50.7	2.7
女子(n=254)	72.8	3.4
大学生(n=605)	50.4	2.5
男子(n=281)	44.5	2.6
女子(n=324)	55.6	2.5
20代社会人(n=937)	34.5	2.7
男子(n=449)	30.3	2.8
女子(n=488)	38.3	2.6

(出所) 電通総研「若者まるわかり調査2015」2015 p.5より作成

表6 人間関係をリセットしたくなることがある(単位:%)

	あてはまる	どちらかという あてはまる	どちらかという あてはまらない	あてはまらない	あてはまる計
全体(n=3000)	25.5	29.2	27.0	18.3	54.7
男子高校生(n=300)	24.0	20.3	33.7	22.0	44.3
女子高校生(n=286)	39.5	28.3	18.9	13.3	67.8
男子大学生(n=417)	17.3	31.2	32.6	18.9	48.4
女子大学生(n=395)	28.1	34.9	24.6	12.4	63.0
20代社会人男子(n=825)	20.1	27.9	30.2	21.8	48.0
20代社会人女子(n=777)	29.6	30.4	22.4	17.6	60.0

(出所) 電通総研「若者まるわかり調査2015」2015 p.6 より作成

高校では、67.8%の生徒が回答している。ここでも、多くの女子高校生が人間関係におけるストレスを抱えていることがうかがえる。

では、以上のようなデータが示した傾向から何を読み取れば良いのだろうか。整理をすると、スマートフォンや携帯電話のようなネットコミュニケーションツールの所有率が、小学生時期においては、それほど高くはないが、中学生、高校生と年齢が上がるにつれて高くなり、高校生では9割以上の生徒が所有している状況にある。そのなかで、友人関係との「つながり」は、こうした情報機器を介したネット空間でつくられるが、その「つながり」は、対象や場面に応じて使い分けられながら構築されているのである。そして、そうした切り替えの方法は、複数のアカウントや「キャラ」を使い分ける、といった言葉で、とりわけ、高校生において浸透しているのである。

この「キャラ」を使い分ける若者のメンタリティについては、土井隆義の知見から重要な示唆を得ることができる。土井(2009:24)は、「キャラ」について次のように述べている。

アイデンティティは、いくども揺らぎを繰り返しながら、社会生活のなかで徐々に構築されていくものですが、キャラは、対人関係に応じて意図的に演じられる外キャラにしても、生まれもった人格特性を示す内キャラにしても、あらかじめ出来上がっている固定的なものです。したがって、その輪郭が揺らぐことはありません。状況に応じて切り替えられてはしても、それ自体は変化しないソリッドなものなのです。

さらに、土井(2009:24-25)は、現在のように、価値の物差しが共有されなくなり、個人差が大きくなるなかでは、あえて人格の多面性を削ぎ落とし、限定的な最小限の要素で描き出されえた人物像は、錯綜した不透明な人間関係を単純化し、透明化することとなると論じている。これらは、「キャラ」とは、アイデンティティとは違い、個人の資質に依拠するもので、極めて固定的なものであり、基本的に場面によって変化するものではないことを示している。また、土井(2014:71)は、今日においては、外キャラが内キャラを駆逐し、自らの人格イメージを単純化・平板化させた外キャラを演じ合いながら、複雑化した人間関係を、

破綻させることなく円滑に回していこうと必死になっていると述べている。つまり、現在の若者は、人間の生まれ持った資質がキャラとして定着することを理解し、その範囲内でキャラを演じることで人間関係を維持しようとしているのである。

そして、こうした土井の指摘は、本節でみてきた、若者の「つながり」をめぐる行動や感情をクリアにし、一見、複雑に見えるかれらの人間関係を単純化することができる。すなわち、このようなかれらの様々な場面で「キャラ」を演じる行動は、きわめて表面的な振る舞いであるということではあるが、そうした振る舞いは、複雑化する人間関係をクリアにしながら円滑にするための術であり、それは自身の人格にある「自分らしさ」のような他との相違点は極力出さないような努力を伴うものでもある。さらに、重要なことは、こうした振る舞いには、その場を穏便にしのぎ切りたいという強い願望が隠されており、その空間において、淡々と、しかし、瞬間的にフルパワーを出しながら何とか乗り切りたいという覚悟があるということである。

こうした衝突回避の傾向について土井（2014：62-63）は、価値観が多様化している現在においては、価値観が衝突しあい、軋轢や争いが増えていない理由に、強い承認願望があるからだとしている。さらに、対立を避けて互いの違いを認め合うという一見評価に値するこうした行動の裏には、互いの内面にあまり深入りしなくなったという捉え方ができ、絶え間なく承認を受け続けるために、衝突を回避しておく必要があることを指摘する。また、原（2011：149）の研究においては、小学生のネットいじめは、インターネットの接続時間ではなく、メール回数の多寡と強い相関がみられ、メールでの初期友人関係の構築に重きを置く小学生の特徴であるのと指摘がなされている。このような状況からみれば、小学生においても、既に「つながり」をめぐるストレスを抱えていることや、「キャラ」を演じながら複雑な人間関係を破綻しないように努力していることがうかがえる。そして、小学生は中学生以上に比べてスマートフォンや携帯電話の所有率は低いとはいえ、同様のトラブルを抱えていることや、原が指摘するように、小学生特有の傾向があることも十分に認識しなくてはならない。さらには、かれらも中学生、高校生と成長するとともに、スマートフォン等の情報機器の所有率が高まり、多くの者たちがネット空間のコミュニティに参画することをふまえた対策を講じていかなければならないのである。

本節でみてきた各種データが示したことは、児童、生徒が日常生活を送るなかで、常にこうした気苦労が溢れているがゆえに、「つながりたい」という願望と、「つながらないと不安」という心配や、でも「正直つながりたくない」「できれば人間関係をリセットしたい」という思い、といったどれもが本音であり、かれらの実情を表したものであるといえる。そして、その背景には、不安が増大する現代社会の若者には、常に承認を求め続けることで不安を和らげたいという意識があり、その確認ツールが、LINE、Facebook等のSNSとなっている。そのなかで、繰り返される「いいね」と「シェア」、「それな」は、まさに、この承認願望を表すものであり、常に「つながっている」ことを確認する行為なのである。しかし、こうした行為は、相互理解というよりも、むしろ、自己完結の手段となっており、かれらは、「キャラ」を演じながら、こうしたやりとりを繰り返すうちに疲弊をとまなうと、人間関係をリセッ

トしたいと考えてしまうのである。

4. 自己完結的なコミュニケーションを前提とした集団において求められる「自己を制御する力」

ここまで、学校現場における情報モラル教育の必要性を整理した後、実際に小学生、中高生のインターネットへの接続手段として、スマートフォンや携帯電話をどの程度所有しているのかについてみてきた。そして、高校生のネット空間における友人関係上の「つながり」を舞台とした自身の振る舞いにある願望と本音の複雑なメンタリティについて検討を進めてきた。これらを通してみえてくるのは、かれらはコミュニケーションツールとして情報機器を活用することには非常に長けているが、一方で人間関係を構築するなかで、常にストレスを抱えていることである。また、ネット空間において、キャラを演じる器用さを持ち合わせていないと、トラブルを引き起こしてしまう恐れがあることや、トラブルに備えて友人と一定の距離を保っていたいという想いも垣間みえた。いずれにしても、その舞台は、ネット空間という「バーチャル」ではあるが、かれらにとっては、そこはもはや「リアル」な空間であることをあらためて認識しなくてはならない。

さて、これまでの議論をふまえながら、今一度、かれらに対する情報モラル教育において何が重要なのかについて検討してみたい。ここで重要な視点となるのは、ネット空間を舞台にした人間関係をどのように理解すれば良いのかである。そして、このような角度で議論を進める点では、鈴木謙介の知見から示唆を得ることができる。鈴木（2005：1-15）は、イギリスの社会学者、アンソニーギデンスの「純粋な関係性」⁽¹⁾の概念を下敷きに重要な指摘をしている。まず、鈴木（2005：118-119）は、ギデンスの「再帰的近代化」について「近代の持つ、一定の指向性を有したメカニズムが、明確な目標を欠いた状態に陥ったが故に、際限のない自己回転を始めてしまうという事態を指している」とした。その上で鈴木（2005：118-119）は、再帰的なループ関係の中で、ループをとどめる力は、嗜癖的關係⁽²⁾へと変化するとし、「純粋な関係性」とは、「こうしたループの関係に対し、自分が何を要求しており、そして相手も同様のメカニズムの中で何を要求しているのかについて意識を獲得することで、再帰的關係の悪循環をとどめようとする、そうした「関係性の選び直し」のことをいうのである」と論じている。

ネットいじめ問題で度々指摘されることに、たとえばLINE上で、被害児童、生徒を中傷するような言葉が、嵐のように展開され、さらに過激になっていくという状況がある。まさに、こうした行動は、合理的な理由が存在しない嗜癖的行為のなかで自分自身を制御することが難しくなることで生じる行動のひとつであると考えることができる。ギデンスが述べる「嗜好者は、嗜癖的行為のもたらす高揚感などで、それを止めることができない」といった指摘は、これを言い当てているものである。また、自分や相手が何を要求しているのか、望んでいるのかを自己認識することで、共依存関係において「あるべき姿」を過剰に求めたりするような、対人関係の嗜癖状態に陥らないようにすることが大切となる。この点について、鈴木（2005：119-120）は、携帯依存のような状態の中では、友人との関係を取り結んでいるといより、携

帯自体の中でコミュニケーションを志向しているとしながら、「情報化された通信手段の普及は、それが他者とのコミュニケーションを志向すればするほど、実際には自己完結的なコミュニケーションへと人を動機づけている」とし、「対人関係への嗜癖状態」は、人間関係の問題ではなく、自己論の問題として語らなければならない」としている。

これらは、「キャラ」を演じながら、自らの人格を単純化、平板化することで、複雑化する人間関係を円滑に進めようとする、若者たちの行動を説明する重要な指摘であるといえる。すなわち、かれらの人間関係は、前夜に、バーチャルとリアルとの罅が曖昧なネット空間で結ばれながら、翌日、学校で友人と実際に対面することでリアルとなるが、その時に経験するリアルなはずの人間関係は、バーチャルな感覚を含めながら、依然としてネット空間に居続けているような感覚のままとなる。そして、自己完結的なコミュニケーションという枠組みにおいては、こうした曖昧な空間のなかで、相互に「私たちは純粋な関係性で成り立っている友人同士ですよ？」といった意識を、暗黙のうちに保ちたいと努力し合っているのである。しかし、その意識の背景には、本当ならば自己完結的な人間関係でありたいと思いつつも、冒頭、土井が指摘したように、コミュニケーション能力そのものが、相手との関係の総体であり、自分では変えられない強い拘束力をもっていることにより、かれらは互いに受け身になってしまうことがある。そして、バーチャルとリアル、自己と他者の狭間で起きる矛盾や葛藤を恐れ、自身の人格を単純化、平板化することによって人間関係をできるだけ円滑にしようとするのである。先の「対立を避けて互いの違いを認め合う」という一見評価に値するような行動の裏には、互いの内面にあまり深入りしなくなった」という指摘も、こうした微妙な距離感を説明している。

このような関係性について土井（2004：53-59）は、言葉の介在を必要としない関係で成り立っている親密圏では、他者は他者であって他者でないとされており、その意味で他者は自己の分身に過ぎないが、自分という存在を自分一人で支えきれないことで、自我が肥大化し、一人では自律的できない人間どうしの共依存的な「友情」が形成されることになる論じている。つまり、児童、生徒たちは、ネット空間において言葉を介さないコミュニケーションを取り続けることで、自律的ではない個人同士の共依存的な関係をつくり、そのなかで、微妙なバランスを取りながら日常を送っており、その関係は、純粋な関係性という形で保たれている。しかし、一方で、土井の指摘するキャラというのはソリッドなものであるという指摘が示すように、かれらの人間関係は自己完結的なコミュニケーションという土台において複雑かつ緊迫した空気感のなかで成立しながら、なんとか保たれていることを、学校現場の教師や、我々、大人の側は理解しなくてはならない。

では、このような人間関係のなかで、ネットいじめ問題のようなトラブルは何がきっかけで生じるのであろうか。ギデンス（1995：204-205）によれば「純粋な関係性」の示す特徴のひとつは、「いつの時点においてもいずれか一方のほほ思うままに関係を終わらすことができる点にある。関係性を十分長続きさせるためには、自己投入が必要である。しかしながら、無条件で相手に自己投入していく人は誰でもみな、かりに万一関係が解消した場合に、将来きわめて大きな精神的打撃というリスクを冒すことになるのである」と述べている。さらに、

鈴木 (2005:124-125) は、こうした現代における対人関係が、「何か事実的な繋がりを持った、体験に根ざしたものとしてではなく、「繋がりうること」への意味的な転換を生じている」とし、無内容なメールのやりとりをすることで「繋がりうること」の確認をしていると述べている。そして鈴木 (2005:138) は、このような「繋がりうること」の証左を見出すことを「共同性」とし、これをフックにした、瞬間的な盛り上がりこそが、人々の集団への帰属感の源泉となっていると論じ、この瞬間的な盛り上がりを「カーニヴァル」にあたるとする。このギデンス、鈴木 の指摘は、問題の本質に迫ることとなる。つまり、かれらの、自律的でない個人同士でつくられた一時的な「純粋な関係性」は、一方の判断、感覚、あるいは「ノリ」で簡単に解消されてしまうのである。これほどに脆い関係であるのは、とにかく「つながりたい」という、関係構築の土台や根拠が、あまりに曖昧で表面的なものだからだと考えることができる。前節でもみてきたように、「つながりたい」けど「リセットもしたい」という反目するメンタリティをベースとしたかれらの人間関係づくりは、常に緊張をとめない、そして、脆さに気づかないふりをしながら、個人を主体とした「ノリ」や「サプライズ」⁽³⁾ といった盛り上がりで、その脆さを覆い隠しているようにもみえる。加えて、その盛り上がるの間には「落ち込み」が挟まれており、このテンションの上げ下げを繰り返しながら自己を制御できなくなった個人間で形成される共依存的な共同体は、何かをきっかけに、瞬間的に爆発するのである。それが、リアルな世界での友人間のサプライズパーティのような祭りならば良い。だが反対に、かれらの「純粋な関係性」のようにみえる共依存的な関係において一方が解消した途端、ネット空間において誰かをターゲットとした「いじめ」として暴発する危険性を孕んでいるのである。それを後押しするのは、自分自身を制御しがたい脅迫衝動であり、例えば LINE のなかで過激に繰り返される被害者への中傷は、こうした衝動から起きる行動といえる。

換言すると、この時に、個々が自分を制御できるか否かで、ネット空間での「いじめ」の被害が拡大するのか、あるいは最小限にとどめることができるのか、を決めるといえるのではないだろうか。すなわち、ネット空間において、自己を「制御する力」である。もっと詳細に述べるならば、ネット空間で起きているコミュニケーションにおいて、自分を俯瞰しながら、情報発信を「制御する力」のことであり、この力の育成こそが、情報モラル教育において強調していかなければならない視点だと考えられる。先に文部科学省が示した情報活用能力の情報活用の実践力において「受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力」と記されているが、本稿でもみてきたように、かれらのコミュニケーションは自己完結的であり、受け手、つまり、他者は存在していないのである。

もちろん、多くの児童、生徒は受け手の気持ちを考慮しながら、情報のやりとりができていだろう。しかし、その他の少数の者や、普段は受け手の状況を考えていた者も、一方的に純粋な関係性が解消されたり、嗜好的行為がもたらす高揚感の高まりを引き起こす何らのきっかけが生じたりすることで、かれらのコミュニケーションには他者が存在していない以上、自分が脅迫衝動を抑えきれない状況に陥っていることに気付くのが難しくなる。そして、その状況に歯止めが利かなくなり、例え、自分がいじめの加害者になったとしても、

そのことに気付く術がないのである。

今日の児童、生徒の間で起きる「ネットいじめ」の影響を少しでも軽減していくためには、学校現場では教師、家庭では保護者等の大人の側が、こうしたかれらの人間関係の特質を認識し、情報モラル教育を通して、「自分を制御する力」の重要性を伝えていくことが必要であるといえよう。

5. 結語

冒頭、鈴木や原が指摘しているように、今日、ネット空間と現実世界を区別することはできなくなっており、児童、生徒にとっては、それぞれの世界で起きていることすべてがリアルな出来事となっている。そのなかで、本稿でみてきたように、ネット空間で構築される、かれらの人間関係は「つながり」を求めながら、一方で、「つながりを断ちたい」という葛藤があり、常に不安定な状況におかれている。つまり、今の若者は、本当は一人で気楽にいたいけど、不安だから誰かとはつながっていたい。でも、あまり深入りすると疲れるから、つながりを絶ちたい時もある、を繰り返しているのである。また、こうした不安定な関係性のため、かれらは、基本的に相手には多くを求めず、いつ相手に遮断されても、あるいは、こちらが遮断をしても良いように、一定の距離を置きながら、その距離を保つために「キャラ」を演じるのである。まさに、自己完結的でもあり、かつ防御的な人間関係でもあると捉えることができる。

そして、そうした脆い人間関係のなかで、一旦、ネット空間で「盛り上がり」が生じた時、ネットいじめのように個人に対する過激な中傷が始まると、誰もが競うように「ノリ」を煽ることとなる。重要なことは、こうした「ノリ」は、自己完結的なコミュニケーションでつくりあげられる「盛り上がり」によって起きる現象であり、そこに、被害者はもちろん、知らずに加害者になっている他者すら存在していないことである。ゆえに、こうした特質を背景におく今日のネットいじめ問題を少しでも減らしていくには、情報モラル教育において自己を抑制する力の必要性を強調していくことが大切となり、この点を指摘できたことが本稿の成果のひとつといえる。

また、こうした観点からみれば、「ネット中傷は、相手が傷つくからやめましょう」や「相手の気持ちを考えて行動をしましょう」という、例えば、「他者理解」といった生徒指導や道徳教育で重視される視点からのアプローチでは対応できない側面があるといえる。ただ、それでも学校現場のいじめ対策としては、生徒指導や道徳教育が重要であることは間違いない。例えば、2014年答申「道徳に係る教育課程の改善等について」(文部科学省2014)においても、いじめの問題への対応として「児童生徒がこうした現実の困難な問題に主体的に対処することのできる実効性ある力を育成する上で」、道徳教育が大きな役割を果たすことが強く求められると記されている。結局は、小学生の時期から、いじめ問題に真正面から向き合いながら、道徳的規範意識を高めることや、情報モラル教育に地道に取り組んでいく他ない。そして、何より重要なのは、我々、大人の側が、情報社会といれる今日における若者たちの人間関係の特質を理解し、今後、そうした社会、若者文化に参入していく、子どもたちに、教育を通

じてどのような準備をしてあげることができるのか、といえるだろう。

注

- 1) 「純粋な関係性」の定義についてギデンス（1995:90）は次のように述べている。「社会関係を結ぶというそれだけの目的のために、つまり、互いに相手との結びつきを保つことから得られるもののために社会関係を結び、さらに互いに相手との結びつきを続けたいと思う十分な満足感を互いの関係が生み出していると思えず限りにおいて関係を続けていく、そうした状況を指している」。
- 2) ここで鈴木（2005:116-117）他に向けられたはずの指向が、実際には自己に向けられた志向になっているという、自己言及的なあり方のこと」とし、こうしたループ関係に関わるのが、ギデンスの「嗜癖」という現象であるとする。そして、嗜癖については「単なる日常の行動様式の繰り返しとは異なり、自分自身で制御しがたい脅迫衝動が、様式化されて実行されるような行為である」とし、こうした嗜癖的行為の背景には、「通常合理的な理由は存在しない。にもかかわらず、嗜癖者は、嗜癖的行為のもたらす高揚感などのおかげで、それを止めることができないでいるのである」と述べている。
- 3) 藤本（2015:155-157）は、「サプライズ」について、つながり感を高められる最高のネタをシェアすることを求めていることが背景にあり、サプライズをする側は、秘密を共有している連帯感の高まりとそれを明かすとき高揚感、サプライズされる側にとっては自分のために秘密で計画を進めてくれたという喜び、というものを感じられること、こうした要素を含んだサプライズほど「つながり」を感じられるものはないかもしれないと述べている。

文献

- アンソニーギデンス（松尾精文・松川昭子訳）1995『親密性の変容－近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房
- 土井隆義 2004『「個性」を煽られる子どもたち 親密圏の変容を考える 岩波ブックレット 633』岩波書店
- 土井隆義 2009『キャラ化する/される子どもたち－排除型社会における新たな人間像 岩波ブックレット 759』岩波書店
- 土井隆義 2014『つながりを煽られる子どもたち－ネット依存といじめ問題を考える 岩波ブックレット 903』岩波書店
- 藤川大祐 2014「新しい生徒指導課題としてのスマホ、ネット指導」『月刊教職研修 No.504』
- 藤本耕平 2015「つくし世代「新しい若者」の価値観を読む」光文社

原清治 2011「ネットいじめの実態とその要因（Ⅰ）－学力移動に注目して－」『佛教大学教育学部論集 第22号』

情報教育学研究会（IEC）2013『インターネット社会を生きるための情報倫理』廣済堂

文部科学省 2016年8月7日引用「情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて（情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議最終報告）」1998 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/002/toushin/980801.htm

文部科学省 2016年10月29日引用「道徳に係る教育課程の改善等について」2014 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/10/21/1352890_1.pdf

NHK 2012「中学生・高校生の生活と意識調査・2012」

中村哲也・島村一司 2008「情報化社会における判断力のある生徒の育成－体系的な情報モラル教育を通して－」『国立青少年教育振興機構研究紀要 第8号』

鈴木謙介 2005『カーニヴァル化する社会』講談社

鈴木健介 2013『ウェブ社会のゆくえ〈多孔化〉した現実のなか』NHK出版

(受付日：2016.12.10)